

河内本源氏物語の校訂方法

——若紫巻を中心として（下）——

浅尾 広良

はじめに

河内本源氏物語は校訂本文である。河内守源光行・親行らが、当時伝来していた古写本を集め、校合し、解釈を加えて定本として家に伝えた証本である。『河海抄』によれば、源光行は八本を校合して証本を作ったとある。鳳来寺蔵本・夢浮橋巻の帖末および東山御文庫蔵古写本の奥書によれば二十一部の代表的な古写本を集め、比較し取捨選択したと親行の識語にある。その中で代表的な写本が二條都督伊房卿・冷泉黄門朝隆卿・五條三品俊成卿・京極黄門定家卿各所持本である。令和元年に三河吉田藩主だった大河内家から藤原定家の青表紙本『源氏物語』「若紫」巻が発見されたことで、河内本の元となった本の一つが見られるよ

うになった。勿論、これそのものが河内本の元となったものかどうかは断定できないが、定家関わった源氏物語本文という意味において、大きな差があったとは考えにくい。大島本の調査の進展や、定家本の発見によって、改めて河内本とはどのような性格の本文だったのかが問題になると思われる。

そこで本稿では、河内本が青表紙本（定家本）との比較の中で、どのような特徴を有するものなのかをいくつかの視点から整理してみたい。^②今回、定家本の出現によって青表紙本の元の形が定位できるようになったこと、河内本も『河内本源氏物語校異集成』で確認すれば、河内本に共通する本文を定位できることから、この考察を行ってみたい。なお、考察の中で用いる青表紙本は定家本を用い、河

内本は尾州家本を用いることとする⁽³⁾。青表紙本と河内本と大きく解釈の違いと判断されるところを中心に通覧し、河内本の校訂方法を析出してみたい。前稿では「登場人物の造型の違い」「人物の登場の可否」「状況描写」「光源氏の心境」について考察を試みた⁽⁴⁾。本稿では、これ以外の視点から河内本の特徴を見てみたい。

一 句読点のつけ方

解釈の違いが明らかとなる根拠の一つは、句読点のつけ方である。勿論、原文に句読点が付いているわけではないが、どこで文章を切るかは、文末表現で推測できる。ここでは、場面認識と事柄の連関に絞って両者の差を見てみたい。

(1) 場面認識

場面認識が大きく違っている箇所としては、若紫巻冒頭の場面が挙げられる。

(定) まだあか月におはす。ややふかういる所なりけり。

(1ウ)

(尾) まだあかつきにおはするに、ややふかくいるところ

なりけり。(1ウ)⁽⁵⁾

青表紙本では「まだあかつきにおはす」で一旦文章を切り、そこは「ややふかういる所なりけり」として、その場所の説明に入る。これに対して、河内本では、切らずに一文として繋げる。ここは、現代の注釈書では、「ややふかういる所なりけり」から改行し、段落を分けている箇所である。青表紙本は、文章を切ることで、京を出て北山に着いたところまで一区切りを付け、次に着いた先の様子を語るが、河内本は移動から着いた場所の説明までを繋げた上で区切り、そのまま着いた先の様子を語る。

(定) かちなどまいるほど、日たかくさしあがりぬ。すこしたちいでつつみわたしたまへば(2ウ)

(尾) かちなどまいりて、すこし日たかくなるほどに、たちいでて、見わたしたまへば(2オ)

ここも、青表紙本は「加持などをしていううちに、日が高くなつた」と時間の経過を語り、そこで場面を変え(少し立ち出でて見渡すと)と、光源氏と供人達が見た北山の寺院の様子を語る。新古典文学大系や新編日本古典文学全集でも、「すこしたちいでつつ」からはパラグラフを別にし、場面が変わると認識しているが、河内本では「加持な

どをして、少し日が高くなつたところに、立ち出でて見渡すと」として、切らずに一連の内容とし、場面が変わるといふ意識はない。若紫巻全体で見ると、青表紙本と河内本の場面認識にはほとんど差がないが、この冒頭場面のみに限つていえば、河内本は場面を区切るといふ意識そのものがないと言える。

(2) 事柄の連関

句点の打ち方の違いは、言葉および事柄の繋がりの違いとして表れる。いくつもの言葉を繋いでわざと事柄を関連させたり、あえて文章を切ることでそれを分離する場合もある。例えば、光源氏が紫上を垣間見する場面の最初では次のような差がある。

(定) 人なくつれ／＼なれば、ゆふぐれのいたうかすみたるにまぎれて、かのこしばがきのほどにたちいで給。人／＼は返したまひて、これみつあそむとのぞきたまへば、ただこのにしおもてにしも、仏すへたてまつりてをこなふ、あまなりけり。(7才)

(尾) ひもいとながくつれ／＼なれば、ゆふぐれのいたくかすみたるまぎれに、このこしばがきのもとにたち

いで給て、人／＼はみなかへし給て、これみつばかり御ともにてのぞきたまへば、ただこのにしをもてに、ちぶつすゑたてまつりてをこなふ、あまなりけり。(5ウ〜6才)

青表紙本では、(小柴垣のもとに立ち出でた) (惟光と一緒に覗くと尼が見えた)と文章を区切り、段階を踏んで物語が進行する。これに対し、河内本では、立ち出でるところから尼を垣間見するところまでを一文で繋いでひと続きとし、途中には気を止めず、最後の「あまなりけり」に話が帰結するように誘導する。ここは文章を切らないことによつて、「けり」の付いた「尼」に注目が集まるのであり、句点を読点にして言葉の繋がり方を変えることで、「尼」に焦点が当たるようにしていると考えられる。ここに限らず、河内本は重点を置く箇所注目が集まるような語り方をする傾向がある。

次の例も、言葉の並びはほぼ同じながら、繋がりを変えることで重点の位置を変える例である。

(定) 君は心ちもいとなやましきに、あめすこしうちそそぎ、山かぜひややかにふきたるに、たきのよどみもまさりて、をとたかうきこゆ。すこしねぶたげなる

經のたえくすこきこゆるなど、すずろなる人も、所がら物あはれなり。ましておほしめぐらすことおほくて、まどろまれたまはず。(16才)

(尾) きみはいと心ちのなやましきに、あめすこしうちそそぎ、山風ひやかにかにふきたるに、たきのよどみもまさりて、をとたかくきこゆ。すこしねぶたげなるど經のこゑたえくすこきこゆ。すずろなる人も、ところがらものあはれなるに、ましておほしめぐらすことおほくて、まどろまれたまはず。

(12ウ〜13才)

青表紙本は、光源氏の心境に重ねて雨・山風・滝の音が聞こえてくると語る。それに重ねて絶え絶え聞こえてくる読経の音が、関心のない人でも場所がら神妙な思いになるとして「物あはれなり」と、その様子の哀れさに重点を置き、それにも増して光源氏は神妙な心持ちであるとする。音に読経の声を重ね、「すずろなる人」から光源氏へと、漸層法的な語りで強調するのである。これに対して、河内本は、雨・風・滝の「をとたかくきこゆ」、読経の音が「たえくすこきこゆ」と、聞こえてくる音と声を並べた。その上で、「すずろなる人」と比較した光源氏のまど

ろむこともできない心境を語る。聞こえてくるものを並列に並べ、「すずろなる人」に特に重きは置かず、光源氏の思いに重点が来るように語るのである。

このように、青表紙本と河内本とは句読点の打ち方が違う箇所がある。これにより場面認識が大きく変わるのには主に冒頭場面である。句読点の打ち方を変え、言葉や事柄の繋がりを変えることで、河内本は重点を置く箇所にストリートに注目が集まるようにしていることが判る。

二 判りやすさ

河内本の一番の特徴とされるのが、判りやすさである。青表紙本に比べ、河内本の方が判りやすく感じるの、どのような理由からなのか。その具体的な様態を確認すると、おおよそ三つの特徴が見えてくる。以下にその具体例を挙げながら、特徴を見てみたい。

(1) 文意が正確・自然・論理的

第一の理由は、文意が正確、自然もしくは論理的であることである。河内本は、細かな修正を加えることで、意味が曖昧な箇所を解消させている。修正の仕方は多岐にわた

るので、全ての掲出はできないが、代表的な例をいくつか示してみる。冒頭の場面で言えば、

(定) きたやまになむ、なにがしでらといふ所に、かしこきをこなひびと侍る。(1オ)

(尾) きた山なるなにがしでらといふところになん、いとかしこきおこなひ人はべる。(1オ)

「かしこきをこなひびと」(北山の聖) がいるところが、「きたやま」か「なにがしでら」か。文脈からすれば「寺」であるはずで、「なむ」の位置を変え、係る言葉と受ける言葉を明確にする。さらに「きた山なるなにがしでら」とすることにより正確となり、「かしこきおこなひ人」に「いと」を加えて強調し、光源氏の北山行きを必然化する。

(定) おいかがまりてむろのともまかですと申したれば (1ウ)

(尾) おいかがまりてむろのともえいではべらぬよしまうさせたれば (1オ)

聖が歳を取ってしまったために、室の外にも「出ない」のか(出られない)のかについても、言うまでもなく不可能の文脈の方が相応しい。

(定) みねたかく、ふかきいほの中にぞ、ひじりいりあた

りける。(2オ)

(尾) みねたかく、こぶかきいほのなかにぞ、ひじりはるたりける。(1ウ)

〈深き岩〉ではなく〈木深き岩〉、聖は〈入っていた〉ではなく〈岩穴に〉いた」とするのも同じ流れである。このような微細な言葉の修正が河内本には多数存在する。

次の例は、もう少し長い文脈の中で整理したものである。

(定) すなはちそうづまいりたまへり。ほうしなれど、いと心はづかしく、人がらもやむごとなくよにおもはれ給へる人なれば、かるくしき御ありさまを、はしたなうおぼす。(12オ)

(尾) すなはちそうづまいり給へり。ほうしなれど、人がらいとやむごとなくころはづかしきものによにおもはれたまへる人なれば、かくかるくしき御ありきをいとおしくおぼす。(9ウ)

ここには三箇所の違いがある。一つ目は言葉の順序の入れ替え、二つ目は「御ありさま」を「御ありき」、三つ目は「はしたなし」を「いとおし」とする点である。言葉の順序の入れ替えは、人柄についての世評ゆえ、身分が高い

ことよりも「こころはづかしき」ことの方に重きを置くために起こったことで、河内本の方が理に適っている。さらに、「かるくし」いのは病気になった「御ありさま」(様子)ではなく、病気による「御ありき」(出歩き)である。「はしたなし」は、中途半端が本義でそこから(体裁が悪い)の意となる。しかし、それよりも心恥ずかしい僧都に知られたら困るの意が文脈としては本義であろうから、「いとおし」の方が適している。いずれも文脈として河内本の方がより正確でかつ論理的である。

語順の入れ替えは、ここに限らず多数存在し、多くは文脈を整理し、論理的に繋がるようにする箇所である。光源氏が紫上を所望する理由を述べる場面では、会話中に語順の入れ替えがある。

(定) おもふ心ありて、ゆきかかづらふかたも侍りながら、世に心のしまぬにやあらむ、ひとりずみにてのみなむ。(15オ)

(尾) ゆきかづらうところははべりながら、思こころはへればよに心のしまぬにやあらん、ひとりずみにてのみなん。(12オ)

「おもふ心ありて」に係るのは、「ゆきかかづらふかたも侍

りながら」ではなく、「ひとりずみにてのみなむ」の方である。河内本の修正はそうした理由による。ただし、青表紙本の方が実際の会話の感じに近く、河内本は会話的な要素を残しながら、より論理的である。河内本が青表紙本に比べて判りやすいのは、多くはこうした微細な言葉の修正により文意が明確になったり、論理的になったりする例である。しかし、ここに掲出はしないが、中には変えることの意味が判りにくい例もある。

(2) 繰り返しの整理

理由の第二は、同じ言葉の繰り返しを省くことである。例えば、次のような場合である。

① (定) これなん、なにがしそうづの、このふたとせこもり侍るかたに侍なる(2ウ)3オ)

(尾) かねなん、なにがしそうづの、このふたとせこもりへべるところなる」ときこゆ(2オ)2ウ)

② (定) 君は、なに心もなくねたまへるを、いだしおどろかしたまふに、おどろきて(53ウ)

(尾) きみは、なにこころもなくねたまへるを、いだしおこし給に、おどろきて(40オ)

③ (定) めのとはうちもふされず、物もおほえず、おきる
たり。(56オ)

(尾) めのとはうちもふされず、ものもおほえで、おき
ゐたり。(42オ)

④ (定) 宮わたりたまひてたづねきこえ給けるに、きこえ
やるかたなくてぞわびあへりける。(59オ)

(尾) 宮のわたり給てたづねきこえたまひけるに、申や
るかたなくてぞわびあへりける。(44ウ)

⑤ (定) ゆくゑもしらず、少納言がゐてかくしきこえた
る」とのみきこえさするに(59ウ)

(尾) ゆくゑもしらず、少納言がゐてかくしたてまつれ
る」とのみきこゆるに(44ウ)

⑥ (定) 御あそびがたきのわらはべ、ちごども、いとめづ
らかにいまめかしき御ありさまじもなれば、おも
ふことなくてあそびあへり。(60オ)

(尾) 御あそびがたきのわらはべも、わかき心ちども
に、いとめづらかにいまめかしき御ありさまなれ

ば、思ことなくてあそびあへり。(45オ)

以上に見るように、同じ言葉の繰り返しは勿論のこと、
同じ響きを避ける修正もある。河内本は、定家本等の元と

なる本文を読み込み、こうした言葉の繰り返しに推敲をほ
どこした本文とみて良い。

(3) 言葉の加除による文脈の整理

理由の第三は、言葉の加除による文脈の整理が挙げられ
る。例えば、光源氏が北山で和歌を詠む場面では、

(定) ふきまよふみやまをろしにゆめさめてなみだもよほ
すたきのをとかな

さしぐみにそでぬらしける山水にすめる心はさはぎ
やはする(20オ)

(尾) ふきまよふみやまをろしにゆめさめてなみだもよほ
すたきのをとかな 　　そうづ

さしぐみにそでぬらしける山みづにすめるころは
さわぎやはする(15ウ→16オ)

と、青表紙本では、光源氏と僧都の贈答とも、光源氏の二
首独詠とも読める。しかし、河内本はその誤解を解くよう
に二首目の前に「そうづ」の語を入れ、二人の贈答である
ことを明示する。これは、この後の光源氏・僧都・聖が和
歌を唱和する場面でも、青表紙本では三首目の前に「ひじ
り」の語があるものの、一首目と二首目は詠者の表示はな

い。文脈からして一首目が光源氏、二首目が僧都であることとは判るが、河内本はわざわざ二首目の前に「そうづ」の語を付け加え、三首目の聖とともに、詠者の順番を明示する。

光源氏と帝の会話の場面では、関係性を考慮して言葉を変えている。

(定) ひじりのたうとかりけることなどはせたまふ。くはしくそうしたまへば、「あざりなどにもなるべき物にこそあなれ。をこなひのらうはつもりて、おほやけにしろしめされざりけること」と、らうたがりのたまはせけり。(25オ～25ウ)

(尾) ひじりのたうとがりしことなどはしくそうしたまへば、「あざりなどにもなるべかりけるものこそあなれ。おこなひのこうはつもりて、おほやけにしろしめされざりけること」と、たうとがりのたまはせけり。(20オ)

青表紙本では、帝の問いかけに光源氏が応えるのに対し、河内本は問いかけを省略し、光源氏が見てきた聖のことを過去の助動詞「き」を用いて表現する。文脈からして、帝は聖のことを良く知らず、光源氏の言葉で初めてそ

の靈験を知る。青表紙本は、帝がそのことを悔やむ気持ちから「らうたがる」(いたわる)を用いて話すが、見ず知らずの関係からこの語を使うのはやや不自然である。そのため、河内本は聖の靈巖に敬意を表す形で「たふとがり」(尊がる)と修正したと考えられる。

指示語や敬語、時間を表す言葉を加えることで、時間や空間の認識、身分秩序などを整理する場合もある。光源氏が尼君の邸を訪ねた場面での惟光の発話には次のようになる。

(定) 「こあぜちの大納言のいゑに侍りて、物のたよりにとぶらひて侍りしかば、かのおまうへ、いたうよはりたまひにたれば、なにごともおほえず、となむ申して侍りし」(35ウ～36オ)

(尾) 「これなんこあぜちの大納言の御いへにはべる。一日ものたよりに少納言とぶらひはべりしかば、かのおまうへ、いたくよはりたまへれば、なにごともおほえず、となん申はべりし」(27ウ)

河内本は「これなん」と場所を指示し、故按察大納言の家に「御」をつける。「一日」(先日)と時間を示して「少納言」を窓口¹に尼君の様子を伺ったことが明確に判るな

ど、ひとつひとつ細かく情報を整理する。

朱雀院行幸の準備の場面では、その様子だけでなく、光源氏の心境にまで説明が及ぶ。

(定) まひ人など、やむごとなきいゑのことも、かむだちめ殿上人などもそのかたにつき〜しきは、みなえらせたまへれば、みこたち大臣よりはじめて、とり〜のざえどもならひたまふ、いとまなし。(39ウ〜40オ)

(尾) まゐ人など、やむごとなきいへのことも、かんだちめ殿上人などもそのかたにつき〜しきみなえらせ給へば、みこたち大臣よりはじめてまつりて、とり〜のざえをならはしたまふに、よの中おもしろくいとまなき心ちしてすこしまぎらはしたまふ。(30オ〜30ウ)

「こども」と「殿上人ども」の繰り返しを避けて「殿上人」とし、「つき〜しきは」から係助詞「は」を、「たまへれば」から助動詞「る」を削除し、「みこたち大臣よりはじめ」に謙譲の補助動詞「たてまつる」を入れる。さらに「ざえをならはしたまふに、よの中おもしろく」と行幸の準備に世の中が沸き立つ様子を付け加え、「いとまなし」

と多忙であっただけでなく、それによって心が紛れたと光源氏の心のありようにまで細かく言及する。河内本が助詞・助動詞や敬語を整理するのは全般に見られ、さらに言葉を加えることで登場人物の心境をより細かく丁寧に描く。

次の二つの例は、二条院に連れてこられた後の紫上の不安な心境や様子をより細かく表現する箇所である。

(定) わかぎみ、いとむくつけく、いかにすることならむ、とふるはれたまへど、さすがにこゑたててもえなき給はず。(55ウ)

(尾) わかぎみ、いとむくつけく、いかなるにか、とふるわれたまへど、さすがにこゑたててもなきたまはず。(42オ)

青表紙本では、紫上は気味悪く思い「いかにすることならむ」(私に)どんなことをするのだろうか」と光源氏の行為を恐れるのに対し、河内本は「いかなるにか」(自分)はどうなってしまうのか」と自分の将来を不安に思う。さらに、「さすがにこゑたててもえなき給はず」(さすがに声を立てて泣くこともできない)に対し、「なきたまはず」(不安にはなるが)泣くことはない」とする。青表紙本では光源氏の行為を気味悪く思い、恐怖を抱くが泣くことが

できない怯えた姿として語り、河内本では気味悪く思い震えながらも、氣丈に振る舞い、泣かずにいるというのである。「ふるはれたまへど」と逆接で下に繋がることを考えると、青表紙本より河内本の方が文脈としては自然である。

そんな紫上が二条院の様子を見て少しづつ心が慰められていく場面では、

(定) ひむがしのたいにわたりたまへるに、たちいでて、にはのこだち、いけのかたなどのぞきたまへば、しもがれのせんざい糸にかけるやうにおもしろくて、みもしらぬ四る五るこきませに、ひまなういでいりつつ、げにおかしき所かな、とおぼす。御びやうぶどもなど、いとおかしき糸をみつつ、なぐさめておはするもはかなしや。(57オ〜57ウ)

(尾) ひんがしのたいにわたりたまへるまに、たちいでて、にはのこだち、いけのかたなどのぞきたまへば、しもがれのせんざい糸にかきたるやうにて、見もしらぬ四る五るこきませに、ひまなくいでいりつつ、げにおかしきところかな、とおぼす。屏風などいまめかしき糸を見つつ、なぐさみておはするも

はかなしや。(43オ〜43ウ)

と、河内本では、光源氏が東の対に渡っている「ま」(間)に見たとあり、絵に描いたような霜枯れの前栽や、四位五位の人々が入り出す様子などを眺める。「おもしろくて」を省くのはすぐ後に「げにおかしきところかなとおぼす」と同様の表現があるためであろう。加えて屏風について「おかしき」を「いまめかしき」、「なぐさめておはする」を「なぐさみておはする」とする。河内本が「いとおかしき」を省くのは、直前の「げにおかしきところかな」との繰り返しを避けたためであろうし、二条院の「いまめかしき糸」(見たこともないような)目新しい絵も、二条院および光源氏がつ「いまめかしき」有様を体现するものであろう。紫上が(気持ち)慰めたのか(気持ち)が(慰んだ)のかは、その後「はかなしや」(他愛ない)と語り手が評価することを考えると、自然と慰んだとする河内本の方が理に適っている。

さらに、光源氏が紫上に手習いを教える場面では、

(定) 「いできみもかいたまへ」とあれば、「まだようはかず」とて、みあげたまへるが、なに心なくうつくしげなれば、うちほほゑみて、「よからねど、むげ

にかかぬこそわろけれ。をしへきこえむかし」との給へば、うちそばみてかいたまふてつき、ふでとりたまへるさまのおさなげなるも、らうたうのみおほゆれば、心ながらあやしとおぼす。(58オ～58ウ)

(尾)「いできみもかいたまへ」とのたまへば、「まだえよくはかかず」とて、見あげたまへるが、なにごころもなくうつくしければ、ほをゑみて、「よからねど、むげにかかぬこそわろけれ。をしへきこえんかし」との給へば、うちそばみてかいたまふてつき、ふでとりたまへるさまのおさなきもいとらうたくのみおほゆれば、心ながらあやしとおぼす。(43ウ～44オ)と、青表紙本の後半の「の給へば」「おほゆれば」「おぼす」に注目すれば、語り手は光源氏に尊敬語を用い、一定の距離を保ちながら客観的に語るが、最初の「あれば」の箇所では尊敬語をなくし、語り手は光源氏に寄り添い、光源氏の目を通して紫上の可愛らしさを語る。だからこそ「うつくしげ」や「おさなげ」と視覚情報として語るのであらう。これに対し、河内本は「のたまへば」「の給へば」「おほゆれば」「おぼす」と一貫して光源氏の行為には尊敬語を用い、語り手の立場から客観的に語り、視点が揺れる

ことはない。「よくはえかかず」と不可能とする方が文脈に沿うし、副詞「いと」は紫上の可愛さをより強調する。

これと同じように青表紙本と河内本で敬語のつけ方が違い、河内本の方が一貫して客観的に語る姿勢は次の例でも確認できる。

(定) みこの御すぢにて、かの人にもかよひきこえたるにやと、いとどあはれに、みまほし。人のほどもあてにおかしう、中／＼のさかしら心なく、うちかたらひて心のままにをしへおほしたててみばや、とおぼす。(14ウ)

(尾) みこの御すぢにて、かの人にもかよひたまへるなりけりとおぼすに、いとどあはれに、見まほしくおぼさる。人の御ほどもあてにおかしく、なか／＼のさかしら心もなく、うちかたらひて心のままにおしへたてて見ばや、とおぼす。(11ウ)

青表紙本では最後の「おぼす」の前の「おほしたててみばや」までは、語り手は光源氏と同化して語る。一方、河内本は途中の思考に「なりけりとおぼす」「見まほしくおぼさる」「御ほど」と敬語表現が入り、一貫して語り手の立場から語る。

以上に見るように、河内本は、青表紙本等で曖昧となっているところを文脈に沿って整理し、音の繰り返しを避け、登場人物の心境に細かく寄り添いながら修正を加え、これらにより正確に伝わる文章となつてゐる。敬語のつけ方でも一貫性があり、規範意識をもつて語つてゐる。しかし、それがために青表紙本がもつてゐるような語り手が登場人物に同化するなどの微妙な視点の揺れ等は失われてゐると言える。

三 端役の心境

主要人物の周辺にいて、それらの人々を相対化するのが端役の人々である。彼らの言動は時に物語を動かす原動力にもなり、物語を別の角度から照らし出す装置としても働く。ここでは、王命婦、尼君付きの女房達、少納言乳母のそれぞれの心境について青表紙本と河内本の記述の違いを見てみたい。

(一) 王命婦

王命婦は、光源氏と藤壺の密会を手引きした存在であり、藤壺に一番近い位置にいて、その様子を見てゐる人物

でもある。王命婦の心境で大きく異なるのは、次の箇所である。

(定) 御ゆ殿などにもしたしうつかうまつりて、なにごとの御けしきをもしるくみたてまつりしれる、御めのとごの弁、命婦などぞ、あやしとおもへど、かたみにいひあはずべきにあらねば、猶のがれがたかりける御すくせをぞ、命婦はあさましとおもふ。

(33オ～33ウ)

(尾) 御ゆどのなどのほどにもしたしうつかうまつりて、なにごとの御けしきもしるく見たてまつれる、御めのとの弁、命婦などはかりぞ、あやしく思わくことなれど、かたみにいひあはずべきことにしあらねば、なをのがれがたかりける御すくせをあはれにもおもふ。(25ウ)

藤壺の湯殿に奉仕してゐる「弁」が〈乳母子〉か〈乳母〉かの差も大きい⁶⁾が、藤壺の妊娠を、青表紙本では「命婦は」と限定をつけて「あさまし」と思うのに対し、河内本では「命婦は」の語がないため、弁と命婦の二人が「あはれ」と思うようにも読める。青表紙本の「あさまし」は、藤壺が光源氏と密会した時、およびこの場面の直前で

藤壺自身が自らの宿世を「あさましき御すくせのほど心うし」(33才)と感じていることと同じで、一番近い存在の王命婦もまた藤壺に共感する文脈としてある。一方の河内本では、弁と命婦の二人を主語とした場合、藤壺と帝との宿縁を感じ、子を宿したことを「あはれ」と賞賛する文脈となる。ただし、「なをのがれがたかりける御すくせ」という表現には否定的なニュアンスを含むため、事情を知る王命婦のみの心境と考えれば、藤壺は光源氏の子を宿す宿世であったのだと慨嘆する文脈となる。青表紙本では王命婦は藤壺の思いに共感する存在と位置付け、河内本では藤壺のそれを相対化する存在とするなど、両本で王命婦の立ち位置は違ってくる。

(2) 尼君付きの女房達

尼君付きの女房達の心境は、老女房と若女房の対比として描かれる。光源氏は、北山から帰った翌日に尼君と紫上に消息を送る。それに対する反応が次の文である。

(定) さだすぎたる御めどもには、めもあやにこのましよう見ゆ。あなかたはらいたや、いかがきこえむとおほしわづらふ。(29才)

(尾) さだすぎたる御めどもには、めもあやにのみ見ゆ。あなかたはらいたや、いかがきこえむとおほしわづらふ。(22才)

光源氏から紫上に送られた手紙を見て、老女房達は、筆蹟の見事さ、包みの風情も目も覚めるくらいにすばらしいと、青表紙本は「めもあやにこのましよう見ゆ」と好意的に見る一方、「おほしわづらふ」と困惑する複雑な感情を語る。これに対し、河内本は「このましよう」がなく、驚きはあるものの好意的とは描かず、むしろ困惑することの方に重点を置く。さらに、その後では、

(定) いとわりなき御ほどを、いかにおぼすにかと、ゆゆうしうなむたれもくおほしける。(30才)

(尾) いとわりなき御ほどを、いかにおほすにかとぞ、たれくもおほしける。(23才)

と、光源氏が幼い紫上に執着することに困惑する状況を語る。青表紙本は「ゆゆうしうなむ」と「ゆゆうし」に係助詞をつけて、困惑に恐れや不吉さを強調するが、河内本はこれを削除し、「どう思っているのか」を強調するのみである。これが後段では、

(定) 「なぞこひざらむ」と、うちずじたまへるを、みに

しみてわかき人くおもへり。(42オ〜42ウ)

(尾)「なぞこひざらん」と、うちずじたまへるを、わかき人くはみにしみてめでたしと思きこえたり。

(32オ)

とあり、青表紙本は「みにしみて」思うとあるのに対して、河内本は「みにしみてめでたし」と思い申し上げたとし、若い女房たちがより賞賛する文脈として語る。このように、青表紙本は尼君方の女房の反応について、好意的な感情も困惑も不吉さも、老女房と若い女房の複雑な思いもこと細かく語るのに対し、河内本はその複雑さを弱め、困惑する老女房と賞賛する若女房の対比として、単純化して語っているのである。

(3) 少納言乳母

紫上の乳母である少納言乳母の反応も、青表紙本と河内本で大きく変わる箇所がある。

(定) 少納言、「猶いとゆめの心ちし侍るを、いかにし侍るべきことにか」とやすらへば、「そは心ななり。御みづからわたしたてまつりつれば、かへりなむとあらば、をくりせむかし」との給に、わらひており

ぬ。にはかに、あさましう、むねもしづかならず。

(54ウ〜55オ)

(尾) 少納言、「なをいとゆめのこちしはんべるを、いかにしはんべるべきことにか」とやすらふ。「そは心なり。御みづからわたしたてまつりつれば、かへりなんとあらば、をくりせんかし」とのたまふに、わりなくておりぬ。にはかに、あさましう、むねもしづかならず。(41オ〜41ウ)

紫上と少納言乳母を乗せた車が二条院に着き、少納言乳母が車から降りるのをためらっている、光源氏が声を掛け、観念して降りる時の様子を語った箇所である。青表紙本では「わりなくて」(苦笑して)下りたのに対し、河内本では「わりなくて」(どうしようもないと)半ば諦めて下りたという。次に続く文章に「にはかに、あさましう、むねもしづかならず」と少納言の心境が語られることから、(苦笑して)車を降りることに親行が違和感を覚え「わりなくて」と修正したものか。その意図は未詳だが、文脈としては河内本の方が論理的である。ただし、そうした違和感を残しつつ青表紙本が「わりなくて」を採用したのなら、諦めの心境を持ちながらも表情を明るく取り繕った

文脈となり、内面と外面の違いを際立たせたことになる。

以上が端役の心境についての両本の違いである。王命婦は、青表紙本と河内本とで立ち位置が変わる。尼君方女房達については青表紙本で老女房と若女房の複雑な想いをこっと細かく語るのに対し、河内本はやや単純化する。少納言乳母は、河内本の方が文脈に合うものの、青表紙本はずれを含むことでその心境を際立たせる。

このように端役に関して見ると、青表紙本は主要登場人物との距離をとりながら、共感したり困惑したりする感情をこと細かく語って一人ひとりの人物像を際立たせるが、河内本は文脈に沿いながらもやや単純化し、存在感を薄めている。

四 解釈が異なる箇所

ここでは、わずかな違いから、両本で解釈が大きく異なる箇所について確認をしてみたい。最初は、北山で光源氏たちが明石のことを話題にする場面である。

(定) 「なさけなき人なりてゆかば、さて心やすくても
えをきたらじをや」などいふもあり。(6オ～6ウ)

(尾) 「なさけなき人になりてゆかば、さのみこころにま

かせておきたらじをや」といふもあり。(5オ)

光源氏の供人の一人の発言で、先の播磨守が一人娘をとでも大事にしている、特別な期待を抱いていると述べたことを受けた発言である。格助詞「に」が入るかどうかの差だが、青表紙本で読むと「心ない人が(国司と)なつて赴任したなら、とても気軽に放っておけまい」の意となり、河内本では「(娘自身が)心ない人になつたならば、そのように放つてなどおくことはできない」の意となる。どちらが文脈として適切かは一概に言うことはできない。娘の将来をどの視点から捉えるかでどちらの立場も取りうるからである。

同じく、両本で解釈が異なる箇所は、北山僧都が法話を語った後の光源氏の感想を語る場面である。

(定) そうづ、よのつねなき御物がたり、のちの世のこと
なごきこえしらせたまふ。わがつみのほどおそろし
う、あぢきなきことに心をしめて、いけるかぎりこ
れをおもひなやむべきなめり、ましてのちの世のい
みじかべき、おほしつづけて(12ウ～13オ)

(尾) そうづ、よのなかの御ものがたりきこえ、のちのよ
のこのふかきなごきこえしらせ給に、わが御つみ

のほどおそろしう、あぢきなきことにころをしめて、いけらんかぎりこれを思やむべきにもあらざめり、ましてのちのよはいみじかりぬべきことと、おぼしつづけて（10オ〜10ウ）

違いの一つ目は、僧都の語ったのが「よのつねなき御物がたり」か「よのなかの御ものがたり」かである。「のちの世」との対比であれば〈この世〉の話となるが、生滅変転して常住でないことと関わって二つの世が語られていることを考えると、「よのつねなき御物がたり」〈無常の世の物語〉の方が相応しい。一方、そこで河内本は「のちのよ」の報いが深いことについて語ったとする。それを受けて光源氏が自分の罪業を思う文脈で、青表紙本では〈この世に命がある限り苦しまねばならないのであらう。まして後世の苦患もいかばかりかと思ひ続ける〉の意となるが、河内本では〈生きている限り苦しむということはあるまいが、まして後世の苦しみはいかばかりかと思ひ続ける〉となる。僧都が語った後世の報いが深いことを受けて、「いみじかりぬべき」と「ぬ」と「べし」を使って強調し、後世はひどく苦しむだろうと確信を持つというのである。河内本には因果応報の一貫性があるが、「まして」の繋がり

から言うと、前段を〈生きている間は思い悩むこともあるまい〉とするのは、やや不自然で、なぜこのような本文としたかは未詳である。

物語の理解のあり様が、このような本文の差として現れた例である。

五 些細な差が位置づけを変える例

次の例も、青表紙本と河内本で、本文の作り方が違うことで微妙にニュアンスが変わってくる例である。一つ目は、尼君の筆跡についての描写である。

（定）よしあるてのいとあてなるを、うちすてかいたまへり。（23オ）

（尾）よしあるてのあてにおかしきすぢに、かき給へり。（18オ）

北山を離れる際に、光源氏と尼君が歌の贈答を行った際に、尼君の返歌を記した後の本文である。青表紙本では、尼君の筆跡について「いとあてなる」ととても高貴である（気品がある）文字を「うちすてかいたまへり」と無造作に書き捨てた感じとして、筆跡の高貴さと無造作が同居するものとして描く。河内本では「あてにおかしきすぢに、

かき給へり」と、気品があつて趣深く書いているとして、青表紙本がもつていたようなアンバランスな感じは捨象されている。先にも述べた通り、青表紙本が持っている複雑で微妙なニュアンスが河内本では採用されていない。

二つ目は、秋の末に、光源氏が六条御息所のもとを訪れようとする場面で、

(定) 秋のすゑつかた、いと物心ほそくてなげき給。月の

おかしきよ、しのびたる所に、からうじておもひたちたまへるを、しぐれめいてうちそそく。(35ウ)

(尾) あきのすゑつかたは、いとど物ごころほそくておきふしなげきたまふ。月のおかしきよ、しのびたるところに、からうじておぼしたちたるみちに、しぐれめいてうちそそく。(27オ)

と、青表紙本で「いと物心ほそく」が、河内本では「いとど物ごころほそく」と強調され、さらに「なげき給」が「おきふしなげきたまふ」と寝ても覚めても嘆いたとあり、光源氏の心細さがより強調されている。それを受けて、「月のおかしき夜」に忍び所にやつのことで思い立って出かけると、時雨がぱらついてくるという。青表紙本は光源氏のやつとの決意を阻むものとして時雨を語り、雨のせ

いでますます遠く感じるといふ心境と深く関わらせて語る。ところが、河内本では「いとどごころほそくおきふしなげきたまふ」と心細さを強調し、光源氏の心境について雄弁であるわりに、やつとのことで思い立って行く途中の道に雨が降つたという事実のみを述べるだけで、青表紙本がもつ決意を阻むような雨としては語られない。

河内本は、説明的で判りやすいという評価がされるものの、その説明的という内実を詳しく見ると、ある特定の性質を際立たせ、それ以外の細かな表現を省いて単純化させる傾向がある。さらに、青表紙本には時に情景描写と心理描写を重ねて語る部分がある。ところが、この場面でいえば、河内本は光源氏の心境について雄弁であるわりに、そうした二つの重なりとして読める余地をなくしてしまっていると言える。

六、心情表現と草子地

最後に、心情表現の語られ方と草子地について、青表紙本と河内本とであり方が違って来る箇所について述べてみたい。これは先の敬語の付け方による語り手と登場人物の距離感が違うこととも繋がって来る問題である。ここで

は、光源氏と藤壺の密通場面とその後の場面を取り上げてみる。

(定) うへのおぼつかながりなげききこえたまふ御けしきも、いとくほしうみたてまつりながら (31オ)

(尾) うへのおぼつかながりなげきこえたまふ御けしききこりたまふも、いとをしながら (23ウ)

青表紙本は、帝が藤壺に対して「なげききこえたまふ御けしき」を(光源氏は)「いとくほしうみたてまつりながら」と、光源氏の感情として語る。ここでの語り手は光源氏に同化している。これに対して河内本は、帝の嘆きに「せたまふ」と最高敬語をつけ、それを光源氏が「見たてまつりたまふ」ことも「いとをし」と語る。この「いとをし」は語り手の感想である。河内本は、敬語の付け方を厳密にするがゆえに、語り手は登場人物に同化しづらく、登場人物を客観的に語ることになる。

(定) いかがはたばかりけむ、いとわりなくみてまつるほどさへ、うつつとはおぼえぬぞわびしきや。

(尾) いかがたばかりけん、いとわりなきさまにて見たてまつりたまふ。(24オ)

光源氏が王命婦の助けを借りてやっと藤壺に逢えたという場面では、青表紙本には「ほどさへ、うつつとはおぼえぬぞわびしきや」と光源氏が藤壺と密会している時の心境を語り手が代弁する草子地がある。しかし、河内本ではこれが一切ない。青表紙本がもつ緊迫感と実感が伴わない満たされない光源氏の思いが、河内本では緊張感のみとして語られるのである。

加えて、その後の様子を語る場面では、

(定) 三月になりたまへば、いとしるきほどにて、人くみたてまつりとがむるに、あさましき御すくせのほど心うし。人はおもひよらぬことなれば、この月までそうせさせたまはざりけることとおどろききこゆ。わか御心ひとつには、しるうおぼしわくこともありけり。(33オ)

(尾) 三月ばかりになれば、しるく見たてまつりしることどもありて人はおもひもよらぬことなれば、いままてそうせさせたまはざりけることときこゆるに、あさましかりける御身のすくせのほどいかがおぼししらざらん。(25オ～25ウ)

と、藤壺の妊娠の兆候に対する周りの反応と藤壺の想いが

対比的に語られるところに、大きな違いが現れる。青表紙本にある「人々みたてまつりとがむるに」「心うし」「おどろき」「わか御心ひとつには、しるうおぼしわくこともありけり」といった内容が、河内本ではすべて捨象されているのである。青表紙本では周りの反応と藤壺の想いが、二度に渡って繰り返し対比的に語られ、いずれも藤壺が内省する文脈で締める。一方、河内本は、それらを整理して一度の対比的な文章にまとめ語るだけでなく、最後は藤壺の心境ではなく語り手が藤壺の心境について言及する草子地となっている。ここも、青表紙本がもっている細かで複雑な登場人物の心の揺れが、河内本ではかなり単純化されているとみてよい。

このように、河内本は密通時およびその後の光源氏や藤壺の心の揺れをやや単純化して語っていることが判る。なぜこのように語るのかは判らないが、こうしたことが「河内本は判りやすい」という評価を生んでくる根拠となっているのであろう。

七 語法・文体

本稿では、河内本が語る物語の内容に注目したため、語

法等については特に触れなかった。しかし、若紫巻を青表紙本（定家本）と河内本（尾州家本）とで比較する中で、特徴的に現れる語法として三点のみ指摘しておきたい。一点目は、河内本が青表紙本のイ音便とウ音便のほとんどを元の形に戻している点である。ただし、全て戻しているわけではなく、少数ながら音便のままにしている例があり、かつ、極めて少数ながら、青表紙本で音便になっていない箇所を音便にしている例がある。これらにどのような法則性があるのかは、未詳である。二点目は、謙讓の補助動詞「たまふ」が青表紙本に比べて明らかに多く用いられている点である。これについては、書写当時の意識が本文の書写の際に反映したかとの意見もある⁷⁾。三点目は、敬語表現が登場人物の身分に合わせてきちんと用いようとする傾向が見られる点である。これにより青表紙本が持っている語り手が登場人物に同化するなどの微妙な視点の揺れが失われ、一面的な見方で表現されるようになっていくことは先に見た通りである。ただし、これらはいずれも、なんらかの規範意識をもって河内本を校訂している証であるとも言える。河内学派と呼ばれる学統内での意識であるのか、時代的なそれであるのか、源親行個人のそれであるのか、な

お検討の余地がある。

さらに、河内本の文体的特徴については、既に吉岡曠が「桐壺巻」を題材に取り、次のようにまとめている。

一、不必要な語句を添加することが多く、それによって文章をいたずらに冗長にし、切れ味を鈍くしている。

一、逆に、人物の心情をこまやかに伝えたり、状況を具体的に浮き彫りにするのに有効な語や語成分が脱落すること、あるいは他の語によっていいかえられることも多く、文章はそれによっていちじるしく陰影を欠いたものになる。

一、句と句、文と文との承接関係をことさらに明確にし、原因・結果という形で両者を直線的に結びつける傾きがある。

一、会話や心内語や作中人物の視点からの体験話法的表現あるいは草子地的表現が、語り手の視点からの普通の地の文に変わっているケースが散見する。そのことが読者の臨場感をそこない、多彩で立体的な行文を単調で平板なそれに変えている。⁸⁾

これ以外にも「だらだらとした悪文」「無用な説明的語句の添加」⁹⁾「冗長で、陰影やふくらみを欠く、平板な文体」¹⁰⁾

「一般の人々にわかりやすい本文」¹¹⁾など、吉岡は河内本に對してかなり否定的な評価を並べる。前稿および本稿において見てきた中でも、吉岡の述べる内容と重なる部分はある。河内本の付加されている言葉の多さ、登場人物の心情の雄弁さ、原因・結果で結びつけるあり方は同様と言える。重要なキーワードを欠いたり、登場人物の心境をやや単純化して表現したり、ほんの微細な差で、複雑で微妙なニュアンスを捨象してしまう例も見られた。加えて、敬語の付加により語り手からの地の文となり、一面的となることも述べた。ただし、これらをすべて否定的に評価すべきかどうかは別問題である。

おわりに

前稿および本稿で述べてきたことをまとめてみたい。源親行が河内本を作り上げるにあたっては、二十一部の古写本を集め、比較し取捨選択したと伝えられていて、その中の代表的な写本の一つが藤原定家の青表紙本である。その意味で、定家本から河内本への流れを確認することは、源親行がどのように源氏物語を形作ったのかを跡づけることでもある。「若紫巻」を題材として、本文の立て方を定家

本と比較しながら確認すると、以下のようにまとめられる。

特徴の一つ目は、ある特定の内容に焦点を当てて強調し、そのために不要なものを捨象する傾向がある。主要登場人物の造型描写の際に顕著に現れる。青表紙本は、端役の人々の心境も細かく丁寧に描き、一人ひとりの人物像を際立たせるが、河内本では端役に重きをおかず、文脈に沿いながらやや単純化し、存在感を薄めている。特定の内容を強調するあり方は、句読点の打ち方にも表れている。河内本は、言葉や事柄の繋がりを方々変えることで、重点を置く箇所にストレートに注目が集まるようにしている。一方、不要なものを捨象するという意味では、青表紙本で登場する人物が河内本では出てこないという例もある。

特徴の二つ目は、状況や事柄をやや誇張する傾向が見える。それは人物の行動や心境にも影響を及ぼし、光源氏の心の振れ幅は青表紙本に比べ、河内本の方が大きく描かれている。これが河内本の面白さや魅力にも繋がっている。

特徴の三つ目は、文脈を論理的もしくは正確に繋ごうとする傾向がある。吉岡の言うところの「句と句、文と文と

の承接関係をことさらに明確にし、原因・結果という形で両者を直線的に結びつける傾きがある」と同じである。このために言葉を変えたり加えたりすることが文意を明確にする一方、「不必要な語句」の添加や「冗長」などの評価を招いていると言える。ただし、微細な言葉の修正をしたり、同音の繰り返しを避けたり、敬語を加えて主語を明確にするなどして、誤解の少ない文章となっていることは確かである。

特徴の四つ目は、敬語表現を登場人物の身分に合わせてきちんと用いようとする傾向がある。これも吉岡の言うところの「会話や心内語や作中人物の視点からの体験話法的表現あるいは草子地的表現が、語り手の視点からの普通の地の文に変わっているケースが散見する」とことと重なる。これにより青表紙本が持っている語り手が登場人物に同化するなどの微妙な視点の揺れは失われ、語り手からの客観的な視点で表現されるようになっていく。

河内本は、定家本等の元となった本の物語内容を基本的に継承しながらも、その中で推敲し、重要と思われる内容や主要登場人物の心境をややデフォルメして語る一方、不必要と思われる内容を削除し、重点を置かないことに関し

てはやや単純化して語る。光源氏の心の振れ幅を大きく描くことで、面白さは増すものの、人物の複雑な心の揺れや心理描写と情景描写の重なりなどが少なくなり、興行きや深みは失われているとも言える。また、物語の内容に対する理解の違いから、全く異なる本文となっている箇所もある。

吉岡の指摘が桐壺巻だけを根拠としたのと同じように、今回の考察は若紫巻のみを根拠とし、さらに特徴的な例のみを取り上げ、触れられなかったものもあるため、これでも河内本の校訂方法のすべてを論じられているわけではない。河内本の本文は、他本と大きく異なることがあり、それが何に起因するのか、どのような理解からなされているのかは、引き続き検討していきたい。

注

- (1) 池田亀鑑『源氏物語大成』巻七 研究・資料篇(中央公論社 昭和31(一九五六)年)第一章「青表紙本の形態と性格」第三章「河内本とその成立」
- (2) 河内本が他の本のどれと近いかということは問題とはしなかった。河内本が他の本の本文をそのまま受け継いだとしても、そこには校訂者親行の解釈があり、それによる取

捨選択があるからである。

- (3) 定家本本文は、大河内元冬監修、藤本孝一解題『定家本源氏物語 若紫』(八木書店 令和2(二〇二〇)年)を、河内本本文は、『尾州家河内本源氏物語』第一巻(原本所蔵監修 名古屋市蓬左文庫 八木書店 平成22(二〇一〇)年)をそれぞれ用い、私に翻刻して用いた。(定)は定家本を、(尾)は尾州家本を表す。本文末に丁数と表裏を記した。なお、加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』(風間書房 平成13(二〇〇一)年)を用いて、河内本で共通する本文の箇所を検討した。
- (4) 拙稿「河内本源氏物語の校訂方法―若紫巻を中心として(上)―」(久保朝孝先生退職記念論集『危機下の中古文学二〇二〇』所収 武蔵野書院 令和3(二〇二二)年3月予定)
- (5) 定家本と比較して、尾州家河内本が新たに付け加えた言葉および本文や表記を変えている箇所については太字で記した。~~~~~と~~~~~の傍線を付した箇所は、定家本本文から言葉の順序が入れ替わっている箇所を示している。の傍線を付した箇所は、考察の中で触れている箇所、定家本と尾州家河内本とを比較して違いが顕著な箇所を示している。
- (6) 「めのと」とするのは河内本全てと陽明文庫本、それ以外の青表紙本・別本は「めのと」とする。ただし、「弁、命婦」については河内本の中でも異動があり、高松宮家本

・大島本・岩国吉川家本は「弁の命婦」とする。『花鳥余情』によれば、「諸本に相違あり 一本には御めのと子の弁命婦云々 王命婦は御めのと也 その人の子を弁命婦といふなり 親行本には弁と命婦との間に句をきりて二人の名とす 弁も御めのと也 それと王命婦との二人也」(『松永本花鳥余情』源氏物語古注集成1 桜楓社)と両説あったこと、「めのと子」の場合、王命婦と弁は親子であったこと、親行本では弁と命婦の間に句を切つて別人とし、二人が乳母であったことを述べる。

(7) 杉崎一雄「平安時代の「給ふる」について―源氏物語異文間の差異を中心に―」(『平安時代敬語法の研究―かしまりの語法』とその周辺)所収 有精堂出版 昭和63(一九八八)年

(8) 吉岡曠「桐壺卷異文考証」(『源氏物語と和歌 研究と資料Ⅱ―古代文学論叢第八輯』)所収 武蔵野書院 昭和57(一九八二)年 44～45頁

(9) 吉岡曠注(8)に同じ 32頁

(10) 吉岡曠注(8)に同じ 45頁

(11) 吉岡曠注(8)に同じ 56頁

(本学学長)